

【研究資料】

ラケナモ

—— 1940年〈東京オリンピック〉を夢見た台湾原住民陸上選手 ——

Rakehnamoh: An Indigenous Track and Field Athlete in Taiwan during the Japanese Colonial Era Who Dreamt of Participating the 1940 Tokyo Olympics

菅野 敦志

I. はじめに

本稿は、日本統治時代の台湾で活躍した原住民陸上選手（日本語では先住民であるが、本稿では戦後台湾での正式名称である台湾原住民族にちなんで、原住民族もしくは原住民の語を使用する）であるラケナモについて、ご遺族に対して行った聞き取り調査をまとめた記録である¹。花蓮のアミ族であったラケナモは、1930年代から40年代を通して、中長距離で台湾ならびに原住民族を代表する選手として目覚ましい成長を遂げた。何より、1940年に開催予定であった東京オリンピックに向けて、原住民族からの代表選出が台湾総督府側から求められていくなか、その活躍が大いに期待されていた。しかしながら、戦前にアジア初のオリンピックとして開催されるはずであった同大会も1938年夏に返上され、実現することはなかったため、ラケナモが活躍する機会はずいぶん巡ってくることはなかった。

ラケナモについては、台湾側の研究でも名前が紹介されるだけでその存在がほとんど知られてこなかったが²、筆者は花蓮市公所の協力により、ご遺族を割り出し、聞き取り調査を実施することができた。本稿はその聞き取り調査の記録であり、以下、2018年12月4日に長女の曾菊江および次男の曾文光の両氏に対して行った内容を中心に紹介する。

聞き取り調査は花蓮市内の曾菊江自宅にて実施した（写真1）また、内容については2019年10月22日の再訪時に改めて確認済みであるが、ラケナモの経歴で回想に基づく部分で曖昧な箇所はそのつど明記している。なお、提供された写真や個人情報の公開についても両氏からの許諾を得ている。



写真1 長女・曾菊江と次男・曾文光の両氏
(2018年12月4日、筆者撮影)

II. 生い立ちと競技へのきっかけ

ラケナモは1908年6月7日に花蓮東部の富田（現在の花蓮県光復郷）アミ族の家に生まれた。富田は太巴塢（タバロン）と呼ばれたところで、土地が肥沃で作物の収穫が豊かであるために日本時代に富田と名付けられたとされる。

ラケナモは6人きょうだいの長男であった。内訳は男4人と女2人であったが、ラケナモには性別に関係なくその6人の一番上のきょうだいとして皆をまとめて支えていく役割が求められていたのであろう。彼の持っていた根気強さはこうした家族内での立場から形成されたものでもあったかもしれない。

学校教育であるが、ラケナモが在籍していた当時の教育制度としては、日本人は6年制の小学校、本島人（漢族）は6年制の公学校であったのに対し、原住民は4年制の

公学校として分けられており、ラケナモが通ったのはおそらく太巴壟蕃人公学校（現：太巴壟国民小学）と思われる。子女の菊江と文光の記憶によれば、ラケナモは16歳ごろに花蓮港の地域運動会に出場し、1,500メートルか3,000メートルいずれかの種目で見事優勝を勝ち取り、台東で開催された別の大会でも優秀な成績を残したという。これらの功績が日本人の運動競技関係者の目にとまり、彼は抜擢されて17歳ごろに花蓮港鉄道部に就職することになったとされる。

III. 鉄道部での活躍と明治神宮体育大会「高砂族最初の参加者」

就職当初の勤務地は玉里^{たまざと}であった。玉里は、日本統治時代は花蓮港庁玉里郡玉里街で、ラケナモが生まれた富田から南に位置する場所にあり、今日では花蓮市玉里鎮となっている。ラケナモの残したアルバムには、友人の駅員と思われる青年と2人で玉里駅の看板前に写る写真（写真2）、および「昭和6年（1931年）1月1日」の日付で玉里駅を前に駅員全員で写した集合写真があり（写真3）、その写真にラケナモの若かりし姿を見ることができる。後者の写真の撮影年から計算すれば、ラケナモは当時22歳のはずである。

陸上競技の素質を見出され、鉄道部の陸上を強化するために就職はしたものの、玉里では競技の練習をするうえで環境が不十分であった。そのため、彼は玉里駅から花蓮港駅へと異動となる。異動となった年は不明であ



写真2 玉里駅勤務時の青年ラケナモ（右）
（年代・撮影地不詳、曾菊江氏提供）



写真3 「昭和6年1月1日 玉里駅員一同記念」写真。
ラケナモは中列右から3人目。
（1931年・玉里駅前、曾菊江氏提供）

るが、その後花蓮港駅に職場を変えることとなった。

花蓮港市は東台湾最大の都市であった。ラケナモは花蓮港鉄道部が所有する花蓮港駅そばの職員宿舎に住むこととなった。この職員宿舎での生活は、後に彼が結婚した後も続いた。

台湾で最も流通していた新聞である『台湾日日新報』の見出しにラケナモの名前が大きく掲載されたのは、1932年8月のことであった。花蓮港陸上競技大会において5,000メートル走で見事1着となり、新記録を出したことが報道されたが、その記事でラケナモは「昨年台北に於いて行はれた長距離に花蓮港が独占した時に台湾のフィンランドの綽名を与へられたがこの名を辱めなかつたわけである」と称えられていた³。おそらく彼はこの時点で24歳ごろであったと思われる（写真4）。

そこから台湾ではラケナモに対して熱い視線が注がれていく。とりわけ注目すべきは、1935年11月の第8回明治神宮体育大会陸上競技への参加である。そこでラケナモは、明治神宮体育大会に「高砂族最初の参加者」（高砂族＝日本統治時代に使われた原住民の呼称）として出場を果たしたことが新聞で報道されていた⁴。同大会の報告書には名前が確認できないため、成績自体は振るわなかったのではないかとと思われる。とはいえ、戦後に全国国民体育大会（国体）の前身となる明治神宮体育大会は、当時「日本のオリンピック」



写真4 青年時代
（撮影年・撮影地不詳、曾菊江氏提供）

と称されていた国内最大の競技大会であり、同大会の出場は運動選手にとってきわめて名誉なことであった。

『大阪朝日新聞』（台湾版）では、このラケナモの「初出場」の名誉と雄姿を「特記すべき」点と記していたが⁵、台湾に居住する原住民にとっては、嘉義農林学校が甲子園で準優勝を飾り、同チームの原住民選手が大活躍を果たした野球での功績に続く、大きな榮譽として受け止められていたに違いない（写真5）。

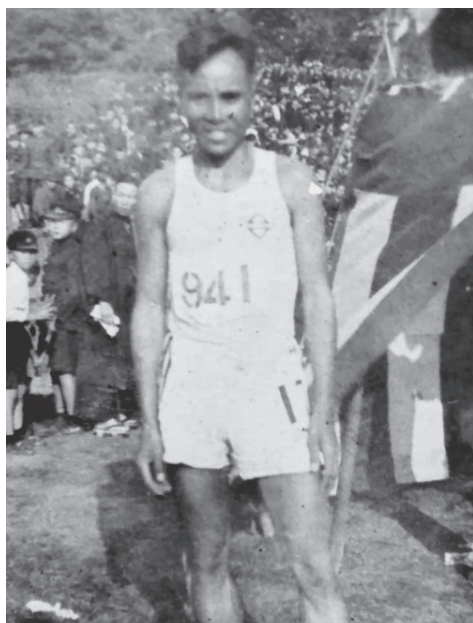


写真5 ある競技大会にて
(撮影年・撮影地不詳，曾菊江氏提供)

IV. “台湾の村社” ラケナモ—東京オリンピックへ出場への期待と無念

村社講平は、1936年のベルリンオリンピックの5,000メートル走と10,000メートル走で4位に入賞するなど、当時の日本の中長距離を代表する選手であった。その村社に並び立つ存在になりうる台湾人選手として、メディアから「台湾の村社」の称号が与えられたのがラケナモであった。

台湾では全台湾陸上競技選手権大会（以下、全島陸上大会）が毎年台湾全島の優秀な選手が一堂に会して開催される競技大会であった。そのラケナモの記録については、5,000メートル走を例にあげれば、1935年9月の第16回全島陸上大会で16分8秒8、翌年の1936年11月の第17回大会で15分46秒6と、自身のタイムを縮めていっただけでなく、台湾新記録を更新し続け、着実に成果を出していった⁶（写真6）。その1936年の全島陸上大会の結果を報じた1936年11月24日の『大阪朝日新聞』（台湾版）



写真6 上：1936年11月21日「第17回全島陸上競技選手権大会出場選手参拝記念」写真。ラケナモは前列左から4人目。後ろ右がもう一人の原住民選手であるカサブラウ
下：ラケナモとカサブラウの両者を拡大したもの（曾菊江氏提供）

で、ラケナモは“台湾の村社”現る 高砂族青年の活躍 五千と一万メートルに新記録！東京大会出場を期待！との大きな見出で報じられ、一躍時の人となった⁷（写真7）。

1937年3月14日、1940年に開催予定である東京オリンピックに向け、台湾体育協会陸上競技部が第

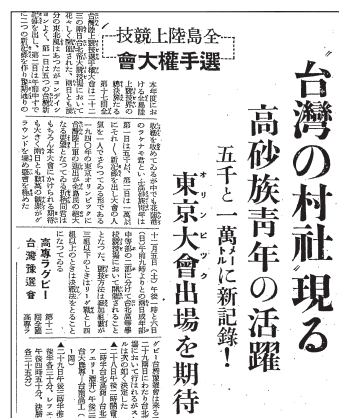


写真7 “台湾の村社”と初めてラケナモが名付けられた新聞報道（『大阪朝日新聞』（台湾版）1936年11月24日）

一次台湾代表候補を選出していた。それらの選手のなかでも、長距離選手の筆頭として名前があげられていたのがラケナモであった⁸。

ちなみに、この4日前には注目すべき記事が『大阪朝日新聞』（台湾版）に掲載されていた。1937年3月10日の同新聞に、「高砂族」初のオリンピック出場選手誕生に向けて、台湾総督府総務長官（兼台湾体育協会名誉会長）・森岡二郎からの「お声懸り」であるとして、当時のラケナモがどれほど注目される選手であるかを示すような記事が掲載されていた。同記事の見出しは、大きく「オリンピック代表 高砂族から出せ／長官のお声懸りで“南島の村社” 養成／花蓮港庁下で初競走会 心臓の強い好記録」と報道され、見出しの左側にはランニング姿のラケナモの写真が写っていた。そのキャプションには、「昨秋全台湾陸上競技大会で一万米決勝に台湾新記録を作った高砂族のホープ・ラケナモ君」と紹介されており、これは明らかに台湾スポーツ界の新星として、スター級の扱いであったといえよう⁹。

ラケナモが残したアルバムには貴重な写真が多く貼り付けられているが、そこには新聞記事の切り抜きも幾つか並んで貼られており、なかでも同記事は、ラケナモのアルバムのなかでもひととき目立っていた（写真8）。ラケナモ本人にとっても、自身のこれまでの競技成績が周囲から大きな期待をもって受け止められ、注目を集めていることにプレッシャーを感じつつも、地道に練習を積み重ねることで確実に評価が得られるというプロセスに、これまでにない自己肯定感を覚えることができてい

たのではないだろうか。

“台湾の村社”とメディアから称されたラケナモであったが、1938年初頭には、ラケナモはその村社と台湾でトレーニングを行う機会に恵まれることとなる。台湾体育協会の招聘を受けた村社講平と南部忠平（ロサンゼルス大会三段跳び金メダル・走り幅跳び銅メダル）の二大有名選手は、台湾在住選手の強化トレーニングとして、3週間の予定で来台し、台湾全島をまわって競技指導を行った。

村社は台湾を離れた後で『陸上日本』雑誌に「台湾コーチ巡り」と題した文章を寄稿しているが、そのなかで村社は、「其の中でも特に有望だと思つたのは、先年神宮競技の五千米に出場したラケナモ選手である」と、ラケナモを名指しで賞賛していたのであった¹⁰。

「花蓮港オリンピック選手後援会」はラケナモを筆頭とする原住民選手の強化を図り結成された。1938年4月には、ラケナモはついに5,000メートル走で15分35秒8と記録を更新した。このことを伝える1938年4月2日の『台湾日日新報』の報道では、次のようにラケナモの健闘ぶりが伝えられていた。

花蓮港オリンピック選手後援会では東京大会目ざして日夜必死の努力をつづけてゐるが、花蓮港長距離界の至宝ラケナモ君は去る二十九日花蓮港グラウンドに於て五千米十五分三十五秒八の新記録を樹立して自己の保有する十五分四十六秒六を十秒八に短縮した、また本年一月三十日同一のグラウンドで作った世界の村社の十五分四十二秒八の台湾新記録を七秒更新した¹¹

この報道では、花蓮港（花岡山）グラウンドで「世界の村社」が出した記録を更新する成果をあげたラケナモの快挙が伝えられていた。「世界の村社」に迫り、日々記録を伸ばし続け、飛躍を続ける彼こそが、来る東京オリンピックに向けて台湾を代表する陸上選手であるとして大きな期待と注目を集めていたことを物語るものであった。

だが、東京オリンピックはこの報道の3カ月後である1938年7月15日に返上されてしまった。1940年の大会開催までの2年間をかけていっそうタイムを縮め、東京大会出場を目標としていたラケナモのショックは大きかったに違いない。結局、ラケナモが東京オリンピックに出場する機会は失われ、その後のオリンピックへの出場のチャンスも巡ってくることはなかった。

その後、1940年には幾つかの記事からラケナモの活躍を知ることができる。1940年9月には台湾総督府主催による紀元2600年奉納台湾体育大会が開催され、5,000メー



写真8 ラケナモがアルバムに切り抜き保存していた『大阪朝日新聞』（台湾版）の新聞記事（傍線はラケナモによるもの）。左上の写真はラケナモ。（『大阪朝日新聞』（台湾版）1937年3月10日、曾菊江氏提供）

トル走と10,000メートル走でラケナモは出場し、33分8秒2の台湾新記録を打ち立てていた¹² (写真9)。また、同年10月から11月に開催された第11回明治神宮国民体育大会でも、5,000メートル走の予選で第1組5着に名前



写真9 1940年9月23日「皇紀2600年奉祝台湾体育大会参加記念」写真。ラケナモは後列左から3人目(曾菊江氏提供)



写真10 1940年10月下旬から11月上旬にかけて開催された第11回明治神宮国民体育大会での台湾チーム記念写真。下に「TAIWAN TRACK AND FIELD TEAM 1940 NAT'L FIELD CHAMPION」とある。ラケナモは前列左から4人目(曾菊江氏提供)

を残した¹³(写真10)。

直後である1940年11月27日からの10日間には、宮崎神宮から畝傍樞原神宮までの駅伝競走が催されたが、内地と外地8地域の出身チーム(東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州、朝鮮・台湾、満州)から160人の選手が参加した¹⁴大会で、朝鮮・台湾の外地チームが見事優勝を果たした。タイムは、優勝した朝鮮・台湾チームが55時間2分32秒で、2位の関東チームのタイムを12分5秒も引き離していた。ラケナモは3日目の第6区(別府警察署から門司駅まで)と9日目(姫路練兵場から大阪大手前まで)第2区の区間優勝者となった¹⁵。この大会でのラケナモの姿は彼のアルバムにも残っているが(写真11)、同年に予定されていたはずの東京オリンピックが開催されなかっただけに、この優勝はラケナモに



写真11 1940年11月宮崎畝傍駅伝大会でのラケナモ(1940年撮影・撮影地不詳、曾菊江氏提供)

とっても大きな喜びであったに違いない。

V. ラケナモの戦中・戦後一宮本勝政から曾富勝へ

ラケナモは、ラケが自身の名前で、ナモが親の名前であったため、ラケ・ナモとなるが、発音(綴り)についても、正しくは「Ra'keh Na'moh」となる。ラケナモには日本名もあり、その名は宮本勝政^{みやもとかつまさ}であった。この名前は鉄道部から毎月支給される給与袋にも記載されている(写真12)。

だが、ラケナモは自身の子どもたちには「名前を隠したらアミ族として仲間にならなくなってしまう、自分は自分、出自を隠すことはない」との信念から、日常では日本名ではなくあえて原住民名を使用していた。そのことを示す一つの証拠として、彼はカタカナで「ラケナモ」と刻印された印鑑を所持し、使用していた(写真13)。例えば、嘉義農林学校で活躍した原住民野球選手は、上松耕一(原住民名:アジマツ)、真山卯一(原住民名:マヤウ)といったように日本名を使用していたが¹⁶、ラケナモは日本名で競技に参加することはなかった。



写真12 「宮本勝政」と記載された給与袋(2018年12月4日、筆者撮影)



写真13 「ラケナモ」とカタカナで刻印された印鑑(2018年12月4日、筆者撮影)

日本統治時代に、「なぜ日本名があるのにラケナモという名前を使用するのか」と問われたものの、それに対してラケナモは「親からもらった名前を使いたい」と答えた、とラケナモ本人から聞かされたと菊江は言う。なぜあえて本来の名前を使い続けるのか。それは自分たちというよりも、その下の世代のためであった。名前から“われわれ”であることが識別できなくなれば、ラケナモがこれだけ懸命に生きた足跡も、多数に紛れて見えなくなってしまう。頑張りさえすれば“われわれ”もこれだけできるのだということを、次世代に伝えたかったのだと、菊江はそう振り返る。わんぱくだった三男は、よく父親に向かって「ラケナモー！」と叫び、父親の反応を見て楽しんでいたという。

1941年から終戦まで、戦況の悪化により、陸上競技の歴史は空白となった。また、戦争はラケナモから競技生活を奪った以外でも、家族を奪い、大きな傷跡を残した。ラケナモは6人きょうだいの長男であったが、弟のひとり「大東亜戦争」において、「南洋」に派遣され、現地で戦死した（写真14）。ラケナモはその弟の死をさぞかし悲しんだのであろう。ラケナモのアルバムには、戦地で撮影されたと思われる弟の勇ましい写真が残されていた。叔父が戦死したのはおそらくフィリピンではなかったかと菊江と文光は記憶しているが、名前までは憶えていないという。

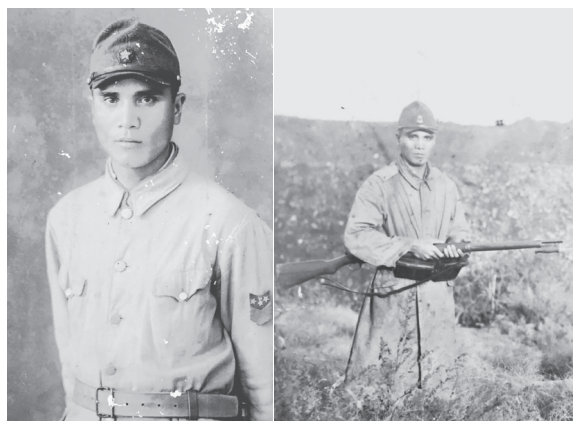


写真14 戦死したラケナモの弟
(撮影年・撮影地不詳、曾菊江氏提供)

戦時中に出征する兵隊には、生きて帰ってこないことを想定して、盛大な壮行会が開かれたという。この戦時中のやり方が戦後の台湾でも引き継がれ、兵役により故郷を離れる若者に対しては同じように盛大な壮行会が開かれ続けたものの、そうした行動は外省系（国民党とともに台湾に移り住んだ中国大陸出身者）の住民からはオーバーリアクションと受け止められていたようだ、と文光は述べる。日本統治時代から戦後の中華民国時代になったといっても、

文化は即座に変えられるものではなかった。

弟が「お国のため」に戦死した一方、ラケナモは兵士としてそうした戦地に赴くことはなかった。その理由の一つに、鉄道部に勤務していたことが幸いしていたと考えられている。日本人職員が次々と召集されて帰らぬ人となるなか、列車を運行させるために必要な専門知識を持つ人員が欠如すると支障をきたすことから、志願兵となる圧力から免れることができたのでは、と見られていた。

とはいえ、子どもたちの戦時中の記憶として、いたるところに防空壕があったことは覚えている。空襲警報のサイレンが鳴り、頭上に飛行機が飛んでいくのが見えると、母親は「B29！」と叫んで子どもたちを連れて一目散に防空壕へと避難した。花蓮の町には今も日本時代に造られた防空壕が残っている（写真15）。



写真15 花蓮市の街中に観光資源として保存・展示されている戦時中の防空壕
(2019年10月22日、筆者撮影)

1945年8月に日本は敗戦した。同年10月25日に台湾は正式に中華民国の一省となった。中華民国への「光復」（祖国復帰）後、ラケナモは新たに中国名によって競技活動を再開させる。その名は「曾富勝^{ツェンフーシェン}」であった。

ラケナモは曾富勝という中国名を名乗ることとなったが、なぜこの名前にしたのかは定かではない。おそらく、「富」は生まれ故郷の富田から、「勝」の字は日本名で使用していた勝政から取ったのではないかと推察される。

ラケナモは、曾富勝として、1947年12月に開催された第二回全省運動会に出場した。同大会では花蓮勢が優秀な成績を収めて優勝した（写真16）。続いて翌年の1948年5月5日には上海で第7回中華民国全国運動会が開催された。その大会にラケナモは1,500メートル走に台湾省代表で出場していた。同大会のパンフレットを見ると、そこには曾富勝の名が確かに確認できる（写真17）。

だが、すでに40歳となっていたラケナモは、この大会を最後に競技人生に終わりを告げ、選手として引退を決

意した。その翌年の1949年末には、国共内戦の結果敗退した国民党と中華民国政府が大陸を追われ、台湾に中央政府を移転させて兩岸が分断された。そのため、同大会は唯一台湾が中華民国全土の代表とともに競うことができた大会となった。



写真16 1947年12月に開催された第二回全省運動会で総合優勝した花蓮県チームの凱旋記念写真。ラケナモは前列右から3人目。(曾菊江氏提供)



写真17 左：1948年5月第7回中華民国全国運動会プログラム
右：同プログラム「男子1,500メートル予選」に記載された第2組「161 曾富勝」(上段右から3番目)
(スタンフォード大学所蔵、筆者撮影)

		第 二 組 (成績)						
號碼	37	65	85	106	122	161	220	260
姓名	宋文堅	伏世鏞	李道洪	倪 潤	王則鳴	曾富勝	陳壽民	劉傑英
單位	青	甘	魯	陸	陸	台	閩	嶺
號碼	267	367	370	471	504	587	613	663
姓名	吳愈遠	王鈔輝	薛鶴奎	朱裕厚	寶文浩	康 權	孫戒非	陳中衍
單位	贛	空	空	京	津	冀	遼	警
號碼	710	732	790	908	1003	1022	1058	1066
姓名	鄧東鳳	趙學鴻	林振然	車史英	劉 卿	王忠誠	藍煥揚	張國勳
單位	湘	平	滬	動	熱	豫	海	海

VI. 父親をめぐる思い出—曾菊江・曾文光の語りから

ラケナモはあまり自身の過去について多くを語ることはなかった。ラケナモの子女は、父親の過去について覚えていることも、母親から言い聞かせられて覚えていることがほとんどであるという。ラケナモの昔を今に伝える貴重なアルバムも、一冊しか残っていない。そのアルバムのなかをのぞくと、かつての日本統治時代にまだ残る多元的な文化のあり様が、各自の服装にも表れていた (写真18)。

かつての宿舎には、ほかにもラケナモの写真や選手時代の新聞の切り抜きなどがあった。だが、それらは強烈な台風が来るたび、海岸沿いに建つ職員宿舎には海水が押し寄せたため、どこかに流され、手元に残ったとしても水に濡れてしまい、廃棄せざるを得なかった。数々の



写真18 日本統治時代に撮影された写真に、洋服、和服、台湾服、そして原住民の伝統的な足巻きを見ることができる。ラケナモは後列左から2人目。(撮影年・撮影地不詳、曾菊江氏提供)

大会で授与された賞状やトロフィーなどもあったというが、もうそうした父親の足跡を記した貴重な史料は台風の被害にあって手元には残っていない。娘の菊江は、いまだに台風が来ると怯え、自身の娘から「なぜ台風ごときでそれほど怯えるのか」と不思議がられるそうだが、それは台風の来襲のたびに、常に死の危険と隣り合わせであった幼いころの記憶が蘇るからだという。

1964年の東京オリンピックの時にも、特に父親が何か周りに言っていたような記憶は残っていないと、子女の曾菊江・曾文光の両氏は述べる。それでも、いつか酒に酔った時などは、「日本時代にもし東京オリンピックが開かれていたら、自分も出場できていたかもしれない」と漏らすことはあったという。

日本統治時代は鉄道部で勤務していたラケナモは、光復後にはその名称が変わったものの、引き続き鉄道局に勤務した。花蓮駅には、日本統治時代には鉄道敷設時に殉職した者のために建立された「献身奉公」碑があったが、その4文字は戦後に「接收記念」へと書き換えられ、ラケナモのアルバムには両時代の碑の写真が残されてい



写真19 左：日本統治期の「献身奉公」碑
右：戦後に「接收記念」へと書き換えられた碑を前に、中央がラケナモ (撮影年・撮影地不詳、曾菊江氏提供)

た(写真19)。戦後の中華民国とは、漢民族にとっては「祖国」であっても、原住民にとってそれは「祖国」と呼べるような存在として捉えられていたのだろうか。ラケナモは、日本から中華民国へと移り変わる二つの時代とその変化をどのように見ていたのであろうか。

ラケナモのアルバムには、おそらく1960年代半ばに撮影されたであろうラケナモ一家の家族写真が残されている(写真20)。鉄道局に勤め、公務員として生活は安定していたものの、給与は多いとはいえなかった。特に戦後は物資が不足し生活が苦しく、両親の苦勞を多く見てきたと菊江は述べる。ただ、「人に迷惑をかけず、やるべきことをやって正直に生きていくことが大事だ」と常々言い聞かされて育ってきた子どもたちにとっては、親の教育方針には日本時代に受けてきた教育が大きな柱となっていたように感じられるという。



写真20 ラケナモ一家の家族写真
前列左から：妻・菊和，ラケナモと孫娘，
三男・文俊
後列左から：次男・文光，長男・文賢，
長女・菊江，次女・菊地
(おそらく1960年代半ば・花蓮にて。曾菊江氏提供)

子どもたちにとっても、幼いながらも、日本時代は治安も良く、非常に安定していたような記憶がある。ラケナモが早いうちからその運動能力を見出され、引き抜かれて鉄道部に就職し、訓練を受けることができたのも、スポーツが重視されていた日本時代であったからその結果であったように思われる、と菊江は述べる。

花蓮の陸上競技場として知られる花岡山グラウンド

は、1937年1月に竣工した。これは、高砂族の選手を訓練するために拡張工事が行われて完成したものであった。このグラウンドは、新聞報道でも触れられているように、高砂族選手、なかでもとりわけラケナモのために造られたとあって良いものであり、事実、子どもたちも母親からそのような聞かされて育った。『陸上日本』雑誌には、「台湾長距離のナンバーワン・ラケナモ選手」とのキャプションで、花蓮港グラウンドで走るラケナモの姿が紹介されていた(写真21)。ラケナモは、その競技人生における輝かしい成績から、周囲からはかなり注目を集めていた人物であった。ラケナモの子女は花蓮地域で親の名前を言うと、決まって「おお、ラケナモの子どもか」といった好意的な反応が返ってきたという。こうしたエピソードからも、花蓮地域においてラケナモの存在がいかに大きかったかがわかる。



写真21 左：1938年の村社來台コーチ時に花岡山グラウンドで走るラケナモ(『陸上日本』第87号，1938年4月，85頁)
右：今日の花岡山総合陸上競技場
(花岡山総合田徑場)
(2019年10月22日，筆者撮影)

台湾が日本から中華民国になったのは菊江が3歳のときであった。戦後、貧しいなか両親は苦勞しながら育ててくれたと話す曾菊江の目には、涙が浮かんでいた。多くの場面において、彼女は漢民族のなかで生きる原住民として、マイノリティとしての居心地の悪さを感じながら生きてきた。かつて、鉄道局の宿舎に住んでいた際には、原住民の職員(家族)は2～3世帯ほどしかいなかったという。原住民出身であるだけで、学校では差別されたり、見下されたりしてきた。小さいころ、学校のクラスには原住民が彼女1人しかおらず、原住民であることで、漢族のクラスメイトからは低く見られていた。原住民の地位が向上した今日とは違い、原住民と漢族の結婚はあり得なかった。エスニシティの壁は厚かったが、それはむしろ彼らの忍耐力や精神力、そして生き抜く力を鍛えることとなったはずである。

父親で思い返されるのは、日本語であるという。父親(ラケナモ)と母親の菊和は家庭内で常に日本語で会話していた。菊江も幼いころには日本語で話していたものの、台湾が中華民国となり日本語が禁止となったことで、

日本語を使うことはなくなり、いつしか忘れてしまった。日本語を忘れたかわりに、学校に通ってからの菊江は、周りが台湾(漢)人ばかりとなったため、必死で閩南語(台湾語=福佬語)を覚えた。きょうだいとの会話も、共通語の北京語だけでなく閩南語も使う。

ラケナモは子どもたちに、運動競技について、「非常に苦しく、決心を固め、最後までやり抜く覚悟で臨まなければ何も残らない」世界であると伝えていた。やはり、競技に取り組んでいた時は相当苦しかったのではないか、だからこそ子どもたちには運動競技を勧めようとはしなかったのではないか、そのように思い出されるという。

より良い将来を子女に願ってのことであろう、子どもたちはいつも成績表をチェックされ、しっかり勉強するように言い聞かされていた。子どもたちにとって、それは、身を立てるには運動よりも、知識を身につけることの方が大事であるという教えであったように感じられた。その教え通り、子どもたちで運動競技の道を選択する者は1人も出ることはなかった。長女の菊江は台湾省立花蓮女子中学に通った後、台北の実践女子家政専科学校(現：実践大学)に通い、卒業後は花蓮で中学校の教師となった。次女の菊地は専業主婦に、長男の文賢は紡績会社の工場長となり、次男の文光は公務員として、花蓮市公所(市役所)で民政課長まで務めた。三男の文俊にいたっては、空軍で戦闘機を操縦していたが、早期退職してエパー航空のパイロットとなり、頻繁に太平洋を往復している。

VII. おわりに

ラケナモは1974年に65歳で定年退職するまで鉄道局で勤務した。しかしながら、その直後である同年8月30日に妻の菊和が亡くなった。死因は喘息の発作によるもので、今日であれば死には至らなかったであろう、と考えられている。54歳であった。

妻に先立たれたラケナモの悲しみは相当なものであったと思われるが、定年後の生活は穏やかな日々が続いた(写真22)。かつて「内地」と呼んでいた日本を再び訪れる機会にも恵まれた。かつて慶



写真22 晩年のラケナモ
(曾菊江氏提供)

応大学との対抗戦、明治神宮大会や宮崎千畝駅伝大会の出場で訪れた日本。アルバムには、日本へと飛び立つ前に、今は無きノースウエスト航空カウンター前で親戚とともに撮影したであろう写真が残っている(写真23)。日本に降り立ち、競技に燃えた若き日々を彼はどのように回顧していたのであろうか。



写真23 日本への旅行に出発するラケナモ(左から2人目)
(1970~80年代ごろの台北の国際空港、曾菊江氏提供)

ラケナモは1997年6月30日に花蓮の地でその生涯を終えた。89歳であった。亡くなる直前には、病院ではなく長年住み慣れた鉄道局の宿舎を希望して戻った。他界した後、ラケナモは先に天国に召された妻と一緒に太巴壟の墓地に入った。太巴壟の地に生まれたラケナモは、太巴壟の土に帰った。

菊江は、ラケナモは生きていくうえで余計なものを一切求めず、シンプルに生きることを好み、それがとても父親らしかったと回想する。日本統治時代には陸上競技の道を、そして戦後は引き続き人生という道をひた走り、その一生を駆け抜けたラケナモであった。

参考文献

- 菅野敦志「1940年と1964年の〈東京オリンピック〉と台湾人選手」『オリンピックスポーツ文化研究』第4号、2019年6月、101-124頁。
- 古川勝三『台湾を愛した日本人Ⅱ―「KANON」野球部名監督・近藤兵太郎の生涯』アトラス出版、2015年。
- 林丁国『観念、組織与实践一日治時期台湾体育運動之発展』新北：稻郷出版社、2012年。

注

¹ ラケナモとその競技成績については、すでに筆者に

よる別稿で紹介を行っている（菅野敦志「1940年と1964年の〈東京オリンピック〉と台湾人選手」『オリンピックスポーツ文化研究』第4号，2019年6月，101-124頁）。本稿では訪問調査によって得られた内容のうち，競技以外の部分も含め，ラケナモ個人およびその人生について紹介するものである。

² 例えば，日本統治期台湾の体育史研究の代表的な成果である林丁国の著作でも，ラケナモは名前と成績だけ紹介されるにとどまっている。林丁国『観念，組織与实践—日治時期台湾体育運動之発展』新北：稻郷出版社，2012年，349頁。

³ 菅野，前掲論文，109頁。

⁴ 同上，110頁。

⁵ 同上。

⁶ 同上，109頁。

⁷ 同記事では，「大会の人気を一人でさらつてゐる」とまで称されていた。同上，110頁。

⁸ 同上，120頁。

⁹ 同上。

¹⁰ 同上，111頁。

¹¹ 同上，110頁，120頁。

¹² 『大阪朝日新聞』（台湾版）1940年9月25日，6面。

¹³ 『大阪朝日新聞』（台湾版）1940年10月31日，6面。厚生省編『紀元二千六百年奉祝 第十一回明治神宮国民体育大会報告書』厚生省，1941年，271頁。

¹⁴ 菅野，前掲論文，111頁，121頁。

¹⁵ 同上。

¹⁶ 古川勝三『台湾を愛した日本人Ⅱ—「KANO」野球部名監督・近藤兵太郎の生涯』アトラス出版，2015年，176-177頁。